

氏 名：石 橋 通 江

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 3 4 号

学位授与年月日：平成 2 1 年 3 月 1 7 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：アルコール治療病棟における看護者の揺らぎと再生

MENTAL FLUCTUATION AND RECOVERY FROM IT OF NURSES IN
ALCOHOLIC WARD

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 濱 田 悦 子

副査 平 澤 美恵子

副査 筒 井 真優美

副査 守 田 美奈子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

アルコール関連問題は年々拡大しているが、アルコール依存症患者の看護については看護者の陰性感情の研究がほとんどで、意欲的に取り組んでいる看護師の存在は注目されてこなかった。そこで本研究では、そうした看護者がどのような経緯を経て、アルコール依存症患者に意欲的にかわるようになったのかを明らかにすることにした。

【研究目的】

アルコール依存症治療病棟における参与観察と看護者へのインタビューを通して、彼らがアルコール依存症患者の看護にいかにして意欲的に取り組むようになったのかを明らかにし、看護者の自己形成にとってアルコール依存症患者の看護がどのような意味をもつのかについて考察する。

【研究方法】

本研究は、エスノグラフィーの手法を用いた質的研究である。病棟でのフィールドワークと研究協力者へのアクティヴ・インタビューを行い、フィールドノートとインタビューの逐語録をもとにデータ分析を行った。

【研究フィールドおよび研究協力者】

フィールドは、民間精神科病院内に設置されたアルコール治療病棟である。ここではアルコールリハビリテーションプログラム（ARP）が積極的に行われ、看護者も治療スタッフとしての責任を分かちもっている。

研究協力者は、この病棟で 3 年以上勤務し、アルコールミーティングの司会経験のある看護者 10 名（男性 5 名、女性 5 名）である。

【倫理的配慮】

本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

研究協力者（看護者）には口頭および文書にて、患者には口頭で、研究の趣旨と自由意思による研究参加、研究以外にデータを使用しないことなど、倫理的配慮について説明し、同意を得た。また、データは個人が特定されないよう匿名化するなどして、個人情報およびプライバシーの保護に努めた。

【結果】

フィールドでは頻繁にミーティングが行われていたが、患者はそうした場では表立ってスタッフを批判したり、不満を口にしたりすることはあまりなかったものの、投書箱には数多くの投書があり、患者の潜在的な怒りが感じられた。実際、患者たちは治療プログラムの中でときにスタッフに対して激しい突き上げを行うことがあった。また、治療の意思が不明確な患者もあり、プログラム途中での退院や短期間での入退院を繰り返していた。一方、スタッフチームの要は病棟担当医でもある院長であった。院長は申し送りの場でも、患者とのかかわりについて看護者に助言や指導を積極的に行っていた。

看護者とのインタビューでは、彼らの多くが幼い頃から喪失や外傷を体験し、早期の自立を迫られていたことが明らかになった。彼らは生活の手段として看護という職業を選んでいたが、アルコール治療病棟に勤務して患者を知るようになり、自分の問題に気づくことになった。

看護者たちは、当初、患者に対して陰性感情を抱いていたが、やがて患者の苦しみを目の当たりにするとともに自分の無知に気づき、専門的な学習に取り組み出した。そして、自分と患者とを照らし合わせることによって自己洞察と患者理解とを深め、おのずとかかわりが変化していった。こうした変化は患者や家族、同僚にも認められるところとなり、それが彼らの自信ともなっており、「人は変わる」ということを信じられるようになった。

一方、治療プログラムの責任をもつことで患者への感受性も増し、さらに治療技術を身につけることにより、患者とも自信をもってかかわれるようになった。さらに、職場と家庭を割り切る対処法を身につけたり、モデルとなる人を見習ったり、さまざまな感情を人に語ったりすることによって自分を支えていた。

【考察】

今は意欲をもってアルコール依存症患者の看護に取り組んでいる看護者たちも、働き出してまもなくは、他の人と同様、陰性感情を体験していた。とくに、一般の精神科病棟に勤務経験のある看護者に陰性感情が顕著であったが、それには、一般の精神科ではアルコール依存症の治療法が確立しておらず治療契約もないことから、患者自身に治療意欲が希薄で、スタッフとの関係もこじれやすく、さまざまな問題を引き起こしていることが影響していた。

アルコール治療病棟では治療契約のもと、真剣に治療に取り組む患者も多く、その苦悩への共感的理解と看護者自身の自己洞察が深まっていたが、それは同時に、看護者に共感疲労とともに自己アイデンティティの揺らぎをもたらしめていた。看護者が患者と似た境遇をもっていればいほど、看護者の自己の揺らぎは深刻になる。しかし、そうした自己洞察の引き起こす痛みを乗り越えて、看護者たちは変化し、それぞれのレジリエンス（反発力・復元力）を発揮し、積極的にアルコール依存症患者の看護に取り組むようになっていった。

こうした揺らぎからの再生を支えた彼らのレジリエンスは、心理劇のディレクター体験や責任

をもって患者の治療にかかわる体験によって大きく高められていた。看護者は治療者として患者たちと関わることで、患者や自己の理解を深めると同時に自信と、さらにスキルアップしようという意欲をもつことができた。さらに、治療プログラムに参加することで看護者としてこうあらねばならないという感情規則から解放されたことや、自分の感情体験を語ることで自らを振り返ることができ、自分が変わったことを患者にも同僚にも認められ、フィードバックされるような環境があったこと、治療の指針を示し、教育的に看護スタッフにもかかわる院長をはじめとして、モデルとなる人や振り返りを促進する人的環境があったことなども、看護者のレジリエンスを高めていたのである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、アルコール依存症患者の看護という今日的課題であり、かつ精神科における看護のなかでももっとも困難な課題の一つとされているテーマに取り組んだ点が、まず評価される。しかも、その困難さだけに止まらず、治療を支援する看護者がどのような自己の揺らぎを体験し、そして再生を遂げていくのかという点に着目したことは、オリジナルな視点といえる。

アルコール依存症患者の看護に関する文献検討も目配りが利いており、十分に行われている。また、研究方法として、アルコール治療病棟でのフィールドワークと看護者へのアクティヴ・インタビューを組み合わせたことで、より実践に密着した、現場のリアリティと深い人間理解を伝える研究となった。

結果では、インタビューデータに先立ち、アルコール治療病棟での治療がどのように行われているのかについて、フィールドノートからの観察データが示されており、この病棟の担当医でもある院長を中心とする独特の病棟文化が浮き彫りにされる一方で、看護者の陰性感情が生まれてくる土壌としての患者と看護者との緊張感に満ちた関係や患者の二面性という特徴とが明確に描かれたところは、エスノグラフィーとしての本研究の特徴がよく生かされている。さらに、研究協力者である個々の看護者が語った彼らのライフヒストリーがつぶさに記述されたことで、看護者の自己の揺らぎという現象が説得力をもって描き出されることになった。

本研究は、看護者のライフヒストリー、とくに人生早期の外傷的体験や喪失体験が、アルコール依存症患者の看護という仕事にどのように結びついていて、それがどのように生かされているのかを明らかにしたことは、看護師のパーソナルな側面が職務遂行上、色濃く反映してくる看護という仕事ならではの現象として注目に値する。さらに、看護者のレジリエンス(反発力・復元力)に注目して、バーンアウトや共感疲労といった問題に陥りやすい看護という仕事にあって、それがどのように支えられ、高められるのかということについて、患者との関係、専門的知識や技術の習得、病棟や学会・研修会などの人的環境といったさまざまな要因をからめて考察した点は、アルコール依存症患者の看護だけでなく、さまざまな看護の分野にもいえることであり、看護学研究として示唆に富むものといえよう。

博士學位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士(看護学)の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。